

過去・現在・未来へのプロジェクト「和独大辞典」

——辞典編纂で知った日本研究の問題点——

イルメラ・日地谷Ⅱキルシュネライト

海外における日本研究の過去・現在・未来を、どのように描写したらよいだろうか。その例として、私の国ドイツの日本研究について考えてみると、どうしても、今進められているドイツ日本学のマンスプロジェクト「和独大事典」に行き着くことになる。この遠大な辞典編纂計画は、ドイツ語圏において特徴的な日本学の伝統に光を当てる格好の例になると思われるからだ。一九九八年に開始されたこのプロジェクトは、国や言語の境界を越えた学問世界・学問

風景の、グローバル規模での連関や発展をも見せてくれるはずだ。

一種の基礎研究プロジェクトとして、多くの分野に利益をもたらすに違いないこの「和独大辞典」は、過去何十年かの日本研究の変遷をもはつきり示してくれるだろう。例えば最近著しいメディアの発展、特にデジタル化が学問世界に与えた大きな影響を知るためにも、

このプロジェクトは非常に適していると思われる。それらに加えて、ネオリベラリズム的風潮の下での学問やその政策などの世界的連関にも我々の眼を向けてくれると思われる。つまり、今最終巻の完成に向かつて進みつつある『和独大辞典』編纂プロジェクトは、まるで集光レンズのように、特にドイツにおける日本研究の過去・現在・未来のほとんどを集約し議論するための格好の例となるのである。

「ゲルマン的」学問理解の伝統

時間的な距離や異質な学問伝統との比較などを通して初めて、いわゆる「国」単位での、それぞれの学問伝統の独特な性格といった

ものを確認できると思うのだが、そのような考えはもちろん、古臭い偏狭な愛国主義を推し進めようとするものではない。人文科学だけでなく自然科学、技術・工学などを含む多くの学問分野が辿った、エポックを股にかけた最近の激しい変遷を省みる時、どうしても学問伝統などという考えに至ってしまうのだが、そこにはさらに、各々の文化や国民の間で異なる発展の様態なども浮かび上がってくる。

世界的に眺めた場合、ドイツ語圏の日本研究・日本学は、まだかなり若い学問だと言えるだろう。この学問分野の発展の段階を、ドイツの教育や大学システムへ組み込まれた時点につなげてみると、一八八七年にベルリンに設立された「オリエント言語研究所」(Seminar für Orientalische Sprachen)の日本語部門、あるいは一九一四年後にハンブルク大学となる「コロニアル研究所」(Hamburgisches Kolonialinstitut)に設けられた、ドイツ初の日本学教授職などが重要となる。つまり、ドイツの日本学がこれまでに築き上げてきた業績を掘り下げる時、我々はこの学問分野のおよそ百年にわたる歴史と向き合うことになるのである。

一九八八年、東京に設立された「ドイツ日本研究所」(DIJ: Deutsches Institut für Japanstudien)は、四年後の一九九二年、研究所のモノグラフィーズの第一巻として、『*Othernesses of Japan: Historical and Cultural Influences of Japanese Studies in Ten Countries*』というタイト

ルの本を出版した。今日においても、例えばある学術論文がどの文化圏内で書かれ、それぞれの伝統が持つ〈知の歴史〉を背景として成立したかを追ってみると、そこには一種の独自性といったものが浮かび上がってくる。そしてこの独自性こそが、なぜ学術論文の一対一的逐語訳が常に不満足な結果しかもたらさず、論文としてはほとんど機能しないかの理由なのである。グローバル化と呼ばれる傾向の下、多くの学術論文が理論の組み立てやその様式など、英語圏モデルを志向しそれに同化しつつある現況を無視するつもりはない。しかしそれでも、何百年にもわたる歴史的・地政学的・社会文化的環境において生まれ育った特殊な学問伝統というものが、今でも確かに存在することを忘れてはならないだろう。

ドイツ日本学の特別な性格とはどんなものかと問うならば、その学問分野の発展は最初から、主に基礎研究書の制作を目指すものであったと言えるかもしれない。ドイツの日本学はその成立以来、現代を強く指向する社会学や経済学的傾向が強まる一九七〇年代までの長い間、主に日本語の原典解説を目指して活動してきたのだが、その際、学問対象である日本の歴史、宗教、文化、文学などの研究活動は、研究のための補助教材制作と並行して進められてきた。いや、むしろ部分的には、研究活動自体が補助教材の出現によって可能になったとも言えるだろう。しかし言語習得のための補助教材である語彙表、辞典、文法書、言語習得書などは、その用途や役割の

実用性からも、これまでその存在を軽く見られる傾向が強かったようだ。しかしどんな種類の補助教材や参考書であろうと、その助けを借りて成される論文や翻訳の出来映えは、利用された教材の質に多くを負っているはずだ。

先に触れたドイツ日本研究所（以下、DIJ）のモノグラフ『*Overnesses in Japan*』は、十カ国の学問的性格を調査した本である。その中で「*teutonic*」（ゲルマン的・ドイツ的）と呼ばれている、ドイツ語圏日本学の特別な性格についてここで詳しく説明はできないが、この後で触れる言語関係参考書以外にも、一九四一年にマーティン・ラミングを発行者としてベルリンで出版された『*Japan-Handbuch*』（日本ハンドブック）、また一九八一年にホルスト・ハメツジが発行した『*Japan-Handbuch*』など、分野ごとに分けた長い論文や記事を集めた百科事典的書物があり、それらは文化だけでなく、教育制度、法制度、軍事制度など学問的・一般的分野をも含んだ、ドイツの日本研究が成し遂げた重厚な業績と呼べるものである（ハメツジのハンドブックはその後二回再版されている）。この二つのハンドブックの発行は、一九八三年に出版された『*Kondansha Encyclopedia of Japan*』よりも前であり、そのオリジナルな性格と解明度は、ドイツ語圏の日本研究が組織的に開拓してきた、同類の参考書群の好例となるものである。DIJは、研究所の文献目録シリーズの一環として、これまで『一八五三年以来の日本・欧米間の文化交流』、『北米への

日本移民』、『一八六八年以降翻訳された日本文学』『日本の大学所蔵特殊文庫解題目録・ドイツ語・日本語併記』などのテーマで、長期にわたる徹底した収集作業から得た結果に解説・注釈を加えた目録を出版しているが、このシリーズは、ドイツ語圏の研究書・参考書などが一九二〇〜三〇年代から培ってきた伝統に連なるものでもある。

これらの目録や補助教材の前書きや付属資料などから明らかになるのは、少数の専門家や知識欲を持つ一般人に読者を限定せず、学問自体の発展を促進しようとする強い意気込みがその動機として見られることだ。そこには、自発的で理論的・体系的な作業こそが学問の発展をうながすとの、固い信念があつたように思われる。その理由からも、これらの成果を補助的・情報提供的資料あるいは単なる組織的材料収集と見なすとすれば、そこにあるジレンマが現れる。それらの研究活動が持つもう一つの側面、その大きな学問的業績と、長期にわたる熟考・理論的反省などの努力が無視されることになるからだ。手に入る資料が限定されていた昔、息の長い計画や調整が必要であつたにもかかわらず、あれほど豊かで有意義な教材が作られたことを思うと、その努力は賛嘆に値するだろう。ドイツ特有のそのような基礎的資料を作り出す傾向は、ドイツ人の徹底した性格から来ると言われているようだが、確かにそんな気質が、「和独大辞典」という大プロジェクトを始動させる源であつたかもしれない。

日本語からドイツ語へ、ドイツ語から日本語への辞書編纂

日本語・ドイツ語間の辞書編纂史の様相はどうなっているのだろうか。実はそれを知るための理想的な本が存在する。一九九九年に言語学者のユルゲン・シュタルフとハラルド・スパンチッチを共同著者としてD I Jから発行された、『辞典と語彙集——部分注釈付き日本語・ドイツ語、ドイツ語・日本語参考書目録』(Wörterbücher und Glossare – Eine teilannotierte Bibliographie japanisch-deutscher und deutsch-japanischer Nachschlagewerke. 和独独和辞典／用語集解題 Jürgen Stalph, Harald Suppanschitsch, ed., München: Iudicium 1999)であり、そこにはなんと一〇二一点の書名が記録されている(図1)。それにしても、そんな目録が何のために必要だったのか。この本の発行当時D I Jの所長であった私は、出版に際して前書きを書いたのだが、ここで自分のその文章を引用してみよう。

異なる文化や社会の間を仲介するためには、それぞれの言語に対する知識や能力がかならず必要となる。言い換えればそれは、言語を通じた相手との交流ほど根源的・基本的なものはないということであり、異国語理解のためには、言語辞典・辞書などが最も重要で便利な補助資料・参考書となる。二つの言語

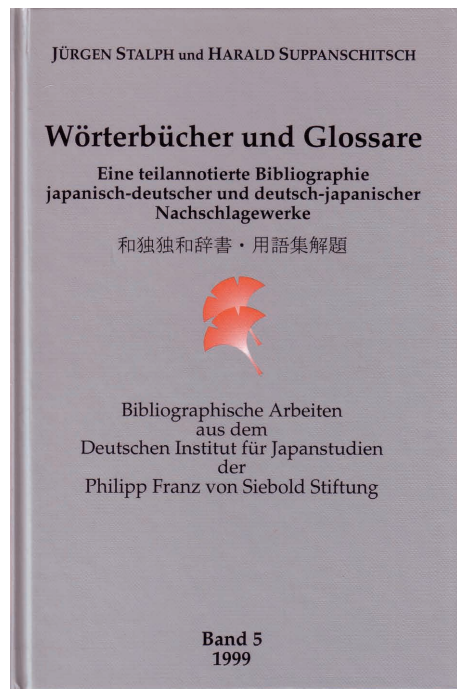


図1 『辞典と語彙集』

間に存在する参考書や辞典を組織的にまとめ上げる作業が、いかに過去の歴史状況や発展確認のための助けとなるかは、この文献目録を手にすることでただちに理解できるだろう。おそらくは誰もが予想もしなかった、驚嘆に値する膨大な資料がこの本の中に集められているからだ。日独両言語間で活動する翻訳家、通訳、特殊分野の専門家などは、この本を通して、例えば『発破用語辞典』『発酵工業用語辞典』『造園大辞典』など、相手国の各分野に触れることができる。このような参考書が存在を知ることが、それらの人々にとっていかに貴重な助けとなるかは計り知れないだろう。『国際馬事辞典』『独和馬事小事典』

あるいは『和・英・独対照染色加工学字典』などの非常に特殊な分野にさえ、複数の参考書が存在していることをこの本は教えてくれるが、それらに加えて、一部の書物については注釈や解説が加えられているという事実も、この本の価値を高めるための一翼を担っている。

普段その存在を特に意識しているわけではないが、辞典・字典は私たちの日常において必須の生活の利器である。ここに集められている膨大な記録は、我々に新しい視点を提供してくれるだけではない。例えば、この目録に含まれている一六九冊の一般的な語彙辞典・字典を見ていくと、非常に興味深い情報をも得ることができる。ある辞書が、いつ大きな変更を経ているか、あるいはほとんどそのままなのか、どれほどの時間的間隔を置いて、何度再版されたか、などを知ることができるからだ。この本に四十点ほど集められている格言集や慣用句一覧表から、自分の好きなものを探し出して読むなど、非常に実用的な使い方もできる。また自らの問いへの答えを見つけるために、日本語→ドイツ語、ドイツ語→日本語の辞書編纂史内に、「共時態」と「通時態」、つまり縦横の切れ目を入れることで、いささか特殊ではあるが強い供述の力を持つ、何百年にもわたるそれぞれの社会や言語構造への入り口確認などが可能となり、多くの問いに答えを与えてくれる。カール・ペーター・トゥーンベル

ク（二七九二年）やユリウス・フォン・クラッププロート（二八三三年）の、数ヶ国語を網羅することもあつた語彙集や、十九世後半から二十世紀全般にかけて、日本の学者によつて編纂された無数と言つてもよい言語辞典やガイドブック、様々な専門語彙集などには、日独両国関係における医学、法律、哲学、軍事などへの特別な関心といった具体的な歴史が映し出されている。これらの本の注釈やグラフィック、写真などを通して、一九三七～三八年出版の『オリンピックのための日本語』（一九三六年ベルリンオリンピックの次に、東京オリンピックの開催が決まっていた）、一九〇〇年に出版された『日独軍事対話』などにより、両国の歴史的関係がまざまざとよみがえってくる。その意味からもこの文献目録は、ドイツ日本研究所の規約で決められている「日独関係の資料整備と探究」という、研究所に課せられた役割に大きく貢献しているのである。組織的に集められた資料を基にしたこの文献目録は、おそらく多くの分野のために新しい道を開いてくれることだろう。

これが、この文献目録の発刊に際して私が書いた前書きであるが、おそらくこの本を手にするほとんどの者が、このような本を読むことがいかに刺激的であり、そこから情報や解答を求める者は、この目録が前に進むための数多くの道筋を示してくれることを理解する

に違いない。

いささか逆説的に思えるのは、このような本の著者たち自身が、その編纂作業の対象である文献の著者でもあるという事実であるが、一九九八年に開始された「和独大辞典」プロジェクトは、当然この文献目録に集められた情報を基礎にして編纂されるべきであり、同時にそれは、この目録内に記録された多くの文献の間にある隙間を埋めることをその目標にもしている。しかし、気が遠くなるほど数多く存在する日独言語辞典群の間に、まだ隙間を見つけることなどできるのだろうか。ところがその隙間の存在を、両言語間で仕事をしている専門家たちは長い間感じていたのである。時代に合致する語彙を含んだ独和辞典が、数多く存在してはいた。日本は理由もなく、「記録と参考辞典の国」と呼ばれているわけではない。ドイツ学に携わってきた日本の同僚たちは、過去何世代にもわたって質の高い辞典類を発行してきたが、翻訳という行為が原則として、異国語から自国語へと訳されるように、辞典類においてもそれは同じ方向、つまり独和辞典であった。しかし近代日本においては、外国語習得への関心が両方向ともに非常に高かったため、日本の学者はこれまで、翻訳の場合とは逆方向の二言語辞典をも多数出版してきた。特に英和ならびに和英辞典の場合、商業的にも十分に採算がとれるためか、日本の辞書編集者や出版社は、現在でも英語関係の辞書を数多く市場に出している。しかし日独両言語の場合、事情はかなり

異なるようだ。特にそこには明らかな非シンメトリーが見られ、一〇九点の一般的独和辞典に対して、和独辞典は二九点、約四分の一に過ぎない。もちろん、すでに存在している独和辞典の向きを変え、和独辞典に直してバランスを整えるというわけにはいかない。そんな理由から、確かな基盤と豊富な語彙を含み、賢明に選択された見出し語や応用例を備えた和独大辞典の編纂が、今度はドイツ側の主導で行われるべきだと私たちは考えたのである。

歴史を振り返る

もちろん昔から、大きな期待を抱かせる和独辞典編纂の計画や試みはあった。最初の和独辞典は、一八五一年（嘉永四年）に発刊されたアウグスト・フィッツマイアーの『*Wörterbuch der japanischen Sprache*』であったが、この試みは途中で中止となった。七九ページと八〇ページに印刷された両国語は、日本語が石版印刷、ドイツ語が植字印刷で、そこに載せられた約一千の語彙のほとんどは、音節文字「いろは」の「い」に収まるものであったが、おそらく当時としては野心的すぎる計画と膨大な印刷費などが、その頓挫の原因になったと思われる。一八九九年、京都のドイツ学校教師であったルドルフ・レーマンも協力して完成した『*Wörterbuch der japanischen und deutschen Sprache*』という辞書には、嬉しいことに、江戸時代後



図2 『和独大辞典』第15版，1952年。

期から明治初期、つまり十九世紀中頃の語彙が収録されている。もう一つ挙げる価値があると思われる和独辞典は、一九三七年に発行された木村謹治の『和独大辞典』（東京・博友社）である（図2）。この辞書は刊行後も再版され続け、現在までに三十六版を重ねている。すでに登場した言語学者ユルゲン・シュタルフは、木村の和独大辞典について次のように述べている。「この和独大辞典は、幸いにもこれまでずっと再版され続けてきたが、その理由は、これ以上のものがないからである。初心者には必ずしも勧めるべきではないが、中級・上級者の机の上には必ず乗っているべきであり、何らかのかたちでドイツ語を専門とする者には、欠くことのできない辞書

である。木村の辞書は今でも、我々に多くの発想・着想を与えてくれる」。日本学の研究者たちが「キムラ」と呼んでいるこの辞書は、多数の例文が付いた五万六千の見出し語を載せているのだが、残念ながらこれらにこれらの語彙は昭和初期、つまり一九三〇年代前半までの語彙である。もちろん再版に際して「その一部に手を加えるなどの間に合わせの改訂は行われてきた」（シュタルフ）が、それでも発行以来六十年余という巨大な辞典学的空間がそこに口を開けていたのである。

これが、一九九八年に東京のDIJにおいて開始された、和独大辞典プロジェクトのおよその背景である。その二年前の一九九六年の秋、複数の研究分野を担うこのドイツ海外研究所の所長に任命された私は東京に赴任したのだが、それによって、この巨大プロジェクトを〈始動〉させるチャンスを得たのである。すでに触れた日独間の辞書編纂の歴史と、当時のアンバランスな状況を研究所の学術理事会に説明し、新しい和独大辞典の編纂が切実な必要性を持つプロジェクトであることを訴え、ついに納得させることができたのだ。和独大辞典編纂は、DIJ設立の背景にある「日独間の相互理解をより深める」という目標にぴたりでもあった。また和独大辞典の編纂が高い文化政策的な意義をも持つプロジェクトであることは、理事たちも理解していた。それが完成した暁には、日独関係に確固とした基盤がもう一つ加わることになるのである。

このプロジェクト計画が発表されると、日本側からの期待も非常に大きかったが、そこには、和独大辞典のような巨大プロジェクトをドイツ側の主導で編纂することへの、いささかの危惧も含まれていたかと思う。しかし今でも忘れることができないのは、そんな肯定的反応と同時に、初めから我々のプロジェクトへ対する疑問、いや、むしろ感情的とも言える反対の声が、ドイツ側から出ていたことである。「今頃なぜ和独大辞典が必要なのか、立派な和英辞典があるではないか」。当時、国際的にも有名なドイツの学術機関で重要な地位を占め、日本文化、特に日本文学に通暁していると自分を売り込んでいた、東京のドイツ大使館駐在経験のある元外交官が、そんな理由を挙げ強く反対したのである。「初心者はその大辞典を必要としない。もつと日本を知りたい者は日本語の辞書を使えばよい」そう反対する者もいた。

このような反対意見は明らかに、それまで積極的に辞書を使いそれに頼る必要がなかった、自称日本通からのものであったと思われる。彼らはそれまで、言語的説明や仲介をしたことがなかった、またはそれをする必要がなかった、あるいはそれが出来ない人々だと思われるからだ。もちろん、単にある専門語の意味を知りたい、日常的語彙を調べたいなどという者は、多くの例文を含む大辞典を必要としないだろう。しかし、英語を通して日本語を理解すれば十分であると考える人々は、第三の言語を加えた三角関係から生じる、

あの有名な「伝言ゲーム効果」を許容するだけでなく、和独辞典本来の目的語である自らの母語ドイツ語を、英語に従う言語へと格下げてしまうことになる。つまりそれらの人々は、言語というもののどのように機能するかをまったく理解していないのだ。二言語間辞書の役割とは、一対一的な対応形でそれぞれの単語を羅列することにあるのではない。そのような一対一形式は、たとえば植物相IIフローラや動物相IIファウナ、あるいは化学元素や分子、IT、コンピュータなど、それぞれの分野の特殊な語彙においては意味があるだろう。しかしそのような専門語彙は、信じられているほどには、頭を抱えるような問題を引き起こすことがない。辞書使用者はそこにある「平地猿(バク)」、「遊撃戦闘機」、「奪格(ラテン語)」「窒息・仮死」などの特殊な語彙を、簡単に理解できたことに満足するだろう。だが実は、真の障害は別にあり、その多くは特別なものではなく、むしろごく日常的な語彙なのである。英語の *mind* をドイツ語に訳そうとする者、あるいはドイツ語の *Hein* を定義しようとする者は、ただちにその事実が気がつくだろう。ドイツ語の表現 *Die Welt zu Gast bei Freunden* を、英語、フランス語、ロシア語などにどう訳したらよいのだろうか。東京のゲーテ・インスティテュートにおけるコンテストでは、この短い問いに対する二十以上の異なる日本語訳が提出されたという。

ドイツの翻訳理論家ユディット・マッハアイナーが言っているよ

うに、各言語それぞれが、自分なりの意味付けの流儀や戦術を持っている。つまり、日本語に含まれている日本的な意図を知って翻訳するためには、どうしても語彙を集めたもの以上の辞典が必要となる。インターネット上にある語彙表や他の多くの辞書類は、それぞれの相対語や相対定義の羅列で終わっていることが多いのだが、例えば「照り降り」という表現が「日照りと雨降り」を意味すると知ったとしても、それだけではまだ何もできない。いったいどんな状況でこの表現が使われるかが重要となるからだ。それがある人物の性格描写に使用された場合、そこでは「照り降りのある人」、つまり「お天気屋さん・気まぐれな人」を意味することになる。それに対して「照り降り傘」とは「全天候傘」のことであり、木村謹治の『和独大辞典』では「Enroucas Ⅱ 晴雨兼用傘」となっている。同じ木村辞典の同ページにある言葉「手先」を例にしてみると、意味の1は「指」、2は「道具」であるが、その例文の「彼は手先が不器用だ」を、木村はドイツ語で「彼は二つの左手を持つ」と訳している。さらに「他人の手先」という表現を言葉通りに訳すと、意味がまるでわからない。この場合、「他人の道具となつて盲目的に働く」を意味しているからだ。

辞書編纂のコンセプトと実際の観点

ここで、私たちの和独大辞典プロジェクトについて発表した説明文章内の、この辞典の「特徴」という部分をそのまま引用してみよう。それにより、この辞典に託した私たちの意図や目標が明らかになると思われるからだ。

特徴

DIJの『和独大辞典』は、明治期から二十世紀初頭までの言葉を網羅したものになる。この辞典の最大の特徴は、これまでの和独辞典にあまり収録されていなかった現代日本語を採録することである。すなわち、ここでもうやく七十年近く空白だった欠落部分が埋められることになる。この辞典では日本の日刊紙と専門誌の中で注釈なしに使用されている用語をすべて収録する。加えて、専門用語や特殊用語（幼児語・若者言葉・俗語など）、そして特に現代の科学・技術用語も取り入れる。

この辞典編纂では、まず第一に、広範囲な人々を対象とした一般的な辞典として、今後数十年間の学術的な日本研究のために信頼できる土台となるべきものとすることに主眼を置くが、さらに現代日本語の形成に決定的な役割を果たした十九世紀後

Stichwort in Lateinschrift 見出し語(ローマ字表記)	<p>aka-bo 赤帽 <i>n.</i> ① die rote Mütze <Kappe>. ② der Bahnhofsgepäckträger, der Gepäckträger, <i>schweiz.</i> der Porteur, der Dienstmann (nach den roten Kapfen, die jap. Bahnhofsgepäckträger ab 1897 trugen; daraus allgemeine bzw. Firmenbez. f. Gepäck- u. Postversand-dienste).</p> <p>ama-sagi 鷺・甘鷺・亜麻鷺・猩猩鷺 <i>n.</i> ① (ORNITH) der Kuhreiher (<i>Bubulus <Ardeola> ibis</i>).</p> <p>② (ICHTH) andere <i>Boz</i> f. waka-sagi 公魚.</p> <p>bateru ばてる <i>v.i.</i> (batenai, bateta) mit den <sein> Kräften <i>fpl</i> am Ende sein, erschöpft sein, <i>ugs.</i> <i>groggy</i> <ausgelaugt, kaputt, fertig> sein, <i>fix</i> u. fertig <am Ende> sein. ◇ 暑さで～ <i>atsusa de</i> ～ völlig fertig <erschöpft> von der Hitze sein. ▶ 最終周、両者ともばてた。In der letzten Runde waren beide mit ihren Kräften am Ende. (Asahi (A), 22.1.01, 3.)</p> <p>BCG → bf-shi-j BCG (ビー・シー・ジー). bi-shi-j (BCG (ビー・シー・ジー) <i>n.</i> (< engl. BCG (MED) (das) BCG (kurz f. Bacille Calmette-Guérin → <i>karumetto-geran-kin</i> カルメットゲラン菌; abgeschwächter (attenuierter) Lebendimpfstoff aus <i>Mycobacterium bovis</i> zur Schutzimpfung gegen Tuberkulose). △ ～接種 <i>-sesshu</i> die BCG-Impfung, die Tbc-Schutzimpfung ～ワクチン der BCG-Impfstoff, die BCG-Vakzine ～陽転 <i>-yōten</i> die BCG-Konversion (Positivwerden e-s bis dahin negativen <i>Tuberkulintests</i> nach BCG-Implung).</p> <p>hunjisen 文字銭 (mist) aus dem Metall des Großen Buddha des <i>Kyōtō</i> Hōkō-Tempels (みだま) geschlagene Kupfermünzen mit der Prägung <i>文王</i> (mon) auf der Rückseite, 17. Jh.</p> <p>bun-maki 分巻き <i>n.</i> (ELEKTR) die Nebenschlusswicklung.</p> <p>chibo ちぼ <i>n.</i> (dial.) der (Taschen-)Dieb.</p> <p>daburusu ダブルス <i>n.</i> (< engl. doubles) (Tennis, Badminton) das Doppel. ▽ 男子～ <i>danshi</i> das Doppel der Herren, das Herrendoppel 女子～ <i>joshi</i> das Doppel der Damen, das Damendoppel 混合～ <i>kongō</i> = ミックス～ das gemischte Doppel, das Mixed-Doppel. ◇ ～の試合 <i>-no shiai</i> das Doppel(match) ～をする ein <im> Doppel spielen テニスの～ das Tennis-Doppel.</p> <p>deka でか・デカ <i>n.</i> (ugs.) (kusodeka 角袖) umgestellt aus <i>kaku-sode</i> 角袖 der weite, rechteckige Kimonoärmel – der (in der Meiji-Zeit) nicht Uniform, sondern japanische Kleidung tragende Polizist bzw. Kriminalbeamte der Kriminalbeamte, der Kriminalpolizist, der Bulle, der Polyp, der Cop, der Kriminal; die Kriminalpolizei, die Kripo. △ ～場 <i>-ba</i> das Gefängnis, die Gefängniszelle, die Zelle ～長 <i>-chō</i> der Kriminalkommissar, der Kommissar, der Inspektor.</p> <p>△ ～衛星 <i>-ha</i> das Gefängnis, die Gefängniszelle, die Zelle ～長 <i>-chō</i> der Kriminalkommissar, der Kommissar, der Inspektor.</p> <p>ei-sei 衛星 <i>n.</i> ① (ASTRON) der Satellit, der Trabant, der Mond. ② (kurz f. → <i>jinkō-eisei</i> 人工衛星) der künstliche Satellit. ◇ ～中継 <i>-chūkai</i> die Satellitenübertragung ～放送 <i>-hōsō</i> die Satellitensendung, die Satellitenübertragung ～管制センター <i>-kansei sentā</i> das Satellitenkontrollzentrum ～軌道 <i>-kidō</i> die Satellitenbahn ～船 <i>-sen</i> der bemannte Erdsatellit ～写真 <i>-shashin</i> das Satellitenfoto ～速度 <i>-sokudo</i> die Kreisgeschwindigkeit (e-s Satelliten) ～通信 <i>-tsūshin</i> die Nachrichtenübermittlung via Satellit.</p> <p>◇ ～軍事 <i>-gunji</i> der Militärsatellit 放送～ <i>hōsō</i> der Rundfunk- und Fernsatsatellit 観測～ <i>kansoku</i> der Beobachtungssatellit 気象～ <i>kishō</i> der Wetter(beobachtung)satellit 商業～ <i>shōgyō</i> der kommerzielle Satellit スパイ～ der Spionagesatellit 通信～ <i>tsūshin</i> der Nachrichtensatellit, der (Tele-)Kommunikationssatellit. ◇ ～中継で <i>-chūkai de</i> via Satellit 通信～放送 <i>tsūshin-hōsō</i> die Satellitensendung, die CS (<i>communications satellite</i>)-Übertragung. ③ <i>fig.</i> (als 1. Bestandteil v. Komposita) Satelliten-, Trabantent. △ ～国家 <i>-kokka</i> der Satellitenstaat ～国 <i>-koku</i> der Satellitenstaat, der Vassallenstaat ～都市 <i>-toshi</i> die Satellitenstadt, die Trabantentstadt.</p> <p>go-aku 五悪 <i>n.</i> (<i>gu-waku</i>) die fünf Übel <i>npl</i> (Töten v. Lebewesen → <i>sesshō</i> 殺生, Diebstahl → <i>chū-tō</i> 偷盗, Unzucht → <i>ja-in</i> 邪淫, Lüge → <i>mō-go</i> 妄語 u. Alkoholgenuss → <i>on-ku</i> 飲酒); das Übertreten der Fünf Gebote <i>npl</i> → <i>go-kai</i> 五戒.</p> <p>go-ha 語派 <i>n.</i> (LING) der Sprachzweig (in der Klassifizierung der Sprachen der Sprachfamilie → <i>go-zoku</i> 語族 untergeordnet). ▽ ゲルマン～ der germanische Sprachzweig.</p>
Abkürzungen mit Auflösungen 省略語(省略ろ・復元形の明記)	
Historische Wörterklärungen 歴史的語釈	
Herkunftsangaben 語源・伝承源の表示	
Angabe gesicherter Etymologien 語誌	
Kennzeichnung des erweiterten Grundwortschatzes 「*印」は拡張基本語	
Wortzusammensetzungen mit Umschrift, Stichwort als 1. Glied 複合語: 見出し語が語頭に来る	
Wortzusammensetzungen, Stichwort als 2. Glied 複合語: 見出し語が語尾に来る	
Fachwortschatz mit Texterläuterungen 専門用語の事義説明	

図3 『和独大辞典』第1巻、見返し

半の日本語語彙の重要なものも選択する。
そのため、少なくとも約十萬語の見出し語が必要となる。この見出し語はまずローマ字(ヘボン式)でアルファベット順に

配列し、続いて通常の日本語表記、品詞、語形変化など、そして、日本語の意味に対応するドイツ語を記す。見出し語には新聞・雑誌、パンフレット、広告・宣伝資料、文学書などから収集した、できるだけ多くの実例とその典拠を示す。すべての用例(複合語、派生語、慣用句)の漢字には、初学者の利便を考慮して、文例の典拠を除いてローマ字も併記する。

これが、私たちが目指したものであり、二十世紀から二十一世紀初期の語彙をも加えた、詳細で信頼できる新しい和独大辞典に要求される条件でもあつ

た。いずれにせよ私たち発行者は、自分たちの和独大辞典に野心的な厳しいハードルを課したのである。しかしこの遠大な計画は、非常に困難な条件の下で出発することとなった。このプロジェクトのために割り当てられた毎年の研究所予算が、なんと、辞書編纂に協

あり、新しい和独大辞典の大きな意義を認めた彼らの援助のおかげで、プロジェクトに対する反対理由の一つであった資金問題を、少なくともこの段階では、一応ぐり抜けることができた。その後、説得力ある私たちのコンセプトや、プロジェクトに対する日独両国

gōshi-shō 合指指 (MED) die Syndaktylie (angeborene Verwachsung v. Fingern od. Zehen).

hayai 早い、速い、疾い、捷い adj. ① schnell, rasch, geschwind; (Fluss, Absatz) reißend, eilig, flink, behend(e), ugs. fix, obs. hurtig; umgehend, prompt, sofortig.

◇ ~返事 ~henji die schnelle <umgehende, prompte> Antwort || ~車 ~kuruma ein schneller Wagen, ein schnelles Auto || ~速度 ~sokudo das schnelle <rasche> Tempo, die schnelle <hohe> Geschwindigkeit || 足が ~ashi ga ~ schnelle Beine mpl haben, schnell (zu Fuß m) sein, schnell gehen <laufen>, e-n schnellen Gang haben; schnellfüßig sein || 気が ~ki ga ~ wenig Geduld / haben, ungeduldig sein; vorschnell sein || 口が ~kuchi ga ~ schnell im Reden n sein, ein schnelles Mundwerk haben; geschwätzig sein || 目が ~me ga ~ → s. v. me 目 || 耳が ~mimi ga ~ → s. v. mimi 耳 || 流れの ~ nagare no ~ kawo 速い reißender Fluss, ein schnell fließender Strom, ein Fluss mit starker Strömung || 理解が ~rikai ga ~ schnell begreifen, e-e schnelle Auffassungsgabe haben || 手が ~te ga ~ → s. v. te 手 || 矢のように ~ ya no yō ni ~ schnell wie ein Pfeil m, pfeilschnell.

▶ 住人がなくなった箱は座敷と同じで、老朽化も早いらしく Eine Schachtel ohne Besitzer ist wie ein unbewohntes Haus, sie verfällt rasch (Abe, Hako-otoko, 77 / 84) || 「うん、君は、頭が早い、方らしいな。きっと、そうだよ、いろいろな、事情を飲み込むのも、早いと思うね。」 Du bist nicht dumm. Ganz ohne Zweifel. Deine Auffassungsgabe ist bemerkenswert. (Abe, Chizu, 44 / 45)

② 早い ③ früh, frühzeitig; rechtzeitig; vorzeitig, vor der Zeit; früher <cher> (als ein anderer, als sonst, als nötig, als erwartet etc.).

◇ ~電車 ~densha die ersten Züge mpl, die erste Bahn (in der Früh) || 早ければ九時に hayakereba kuni ni frühestens <nicht vor> neun Uhr, nicht früher <cher> als (um) neun || 早すぎる haya sugiru zu früh sein, verfrüht sein, vorzeitig <vor der Zeit> sein || ...にはまだ ~ f. etw. <zum ...> noch zu früh sein; noch zu früh sein, um zu ...; es wäre verfrüht, jetzt zu ... || 朝 ~散歩 asa ~ sampo der frühmorgendliche Spaziergang, der Spaziergang am frühen Morgen m <früh am Morgen, in aller Früh(e)> || 朝起きるのが ~ asa okiru no ga ~ morgens früh aufstehen.

◇ しもし朝の出発は夜のしらじら明けに家を出るので、私たちの登校時間よりも二時間あ

り早い。Doch da sie zum Frühdienst schon im Morgengrauen das Haus verließ, brach sie mehr als zwei Stunden vor unserem Schulbeginn auf. (Mishima, Kinkakuji, 12 / 22) || 夏は夜が明けるのが早い。Im Sommer wird es früh hell. (Hyōgen jiten, 730) || 地方と中央の行き来をくりかえすうちに、早ければ二十代の終わりに警視まで昇任する。um dann, irgendwann nach abwechselndem Einsatz in Haupt- und diversen regionalen Dienststellen, allerdings frühestens Ende Zwanzig, zum Hauptkommissar befördert zu werden (Ōsawa, Shinjuku-zame, 71 / 48).

④ hayai ga kachi ~が勝ち Wer zuerst kommt, mahlt zuerst. || hayai hana-shi (ga) ~話(が) kurzum, kurz, in einem Wort, kurz gesagt, um mich kurz zu fassen; das heißt, nämlich; zum Beispiel — 頭痛はあまりにもひどく、その期間には鎮痛用の薬剤が投与された。早い話が麻薬さ。Die Schmerzen (= Kopfschmerzen) waren damals so stark daß man ihm Sedativa verabreichte. Rauschgift, mit einem Wort (Murakami, Hitsuji, 160 / 114) hayai mono gachi ~者勝ち = hayai ga kachi ~が勝ち hayakaro warukaro 早かろう悪かろう hui und pfui; schnell und schlampig (gemacht); die rasch erledigte, aber gepfuschte Arbeit || hayakereba hayai hodo ii 早ければほどいい je früher <cher, schneller>, desto <um so> besser || ... suru ga hayai ka ...するが ~か sobald, sowie, kaum (dass) — 座るが ~か suwaru ga ~ ka sobald man sitzt <sich hingeworfen hat>, kaum hat man sich hingesetzt, kaum dass man sitzt || osokare hayakare 遅かれ早かれ → s. v. osoi 遅い.

NB: ⑤ 早い ~ hayai 早く; hayakute(-mo) 速く(ても).

hiyo-dori 鴨・白頭鳥 n. (ORNITH) ① der Grauhörbühl (Hypsipetes amaurotis; Jahreszeitenwort f. Herbst).

② Gesamtbez. der zur Familie Bülbuls (Pycnonotidae) gehörigen Vögel; der Bülbul.

△ ~科 ~ka die Familie Bülbuls <Haarvögel mpl> (Pycnonotidae) || ~属 ~zoku die Gattung Hypsipetes.

igossō いごっそう n. (DIAL) der Dickkopf, der Dickschädel, der sture Bock <Hund>.

itachi-zame 鼬鯨 n. (ICHTH) der Tigerhai (Galeocerdo cuvieri).

△ ~属 ~zoku die Gattung Tigerhai (Galeocerdo).

Angabe der Wortart

品詞表示

Angabe aller japanischen Schreibweisen

日本語表記を網羅

Kennzeichnung des Grundwortschatzes

「印」は基本語彙

Durchgängige Lateinschrift

用例(ローマ字付き)

Ausschließliche bzw. bevorzugte Schreibung

語義による漢字表記の区別

Verwendungsweisen des Stichwortes

典型的な用例

Satzbelege mit Quellenangabe

出典を明記した文例

Sprichwörter und idiomatische Wendungen

ことわざ・慣用語

Quellenangabe

出典表示

Fachvokabular aus Flora und Fauna

mit Angabe der wissenschaftlichen Namen

各種専門用語(学名付記)

Dialektwörter

方言・なまり

図4 『和独大辞典』第1巻、見返し

力する研究員一人分だけだったからだ。それ以上の費用は、外部から調達せよとのことであった。まるで、プロジェクトの挫折を予想しているかのような、実に過酷な条件である。しかし幸運なことに、この最初の段階で私たちは、強力なスポンサーを得ることができたのだ。それは、研究所理事会の以前のメンバーであったドイツ人実業家と、彼の友人の日本人企業家の二人で

の非常に肯定的な新聞記事などにも助けられ、やがて両国の公的・私的財団や企業などからも資金を集めることができるようになった。こうして、私たちのプロジェクトは動き出したのである(図5)。

日独両国の和独大辞典へ対する反響

アルファベットのAからIまでの見出し語四万五千余を網羅した、二四六九ページに及ぶ『和独大辞典』第一巻 (*Großes japanisch-deutsches Wörterbuch*, Band 1 A-I, hg. Jürgen Stalpb, Irmela Hijija-Kirschneier, Wolfgang Schlecht, Kōji Ueda, München, 2009) が二〇〇九年ついに出版されたが(JからNまでを収録する同規模の第二巻は二〇一五年に出版)、それはドイツと日本のマスメディアにおいて大きな反響を呼び起こした。『和独大辞典』の発刊を、日本では朝日、読売、毎日など多くの新聞が取り上げ、ドイツでも国際的に読まれている全国紙『南ドイツ新聞 (*Süddeutsche Zeitung*)』、『デイ・ヴェルト (*Die Welt*)』、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング (*Frankfurter Allgemeine Zeitung*)』などが、「次の千年のための辞書」などとのタイトルを付けた記事で、一般の読者にもそれを紹介したのは特筆に値することだった。やはり国際的なスイスの新聞『ノイエ・チューリッヒャー・ツァイトゥング (*Neue Zürcher Zeitung*)』はこの辞書に関する長い記事の中で、十九世紀初頭にグリム兄弟によって始まったドイツ文献学



図5 『和独大辞典』第1巻

(フィロロジ)の大きな伝統を強調した後、次のように書いていた。

現在イタリア、ポーランド、フランス、ハンガリーなどのヨーロッパ諸国で、日本語との二言語間辞書の編纂計画が進められているが、この和独大辞典はそれらの規範となるべきものである。今回第一巻が出版されたこの大辞典が、ただ偶然に三〇パーセントのヨーロッパ人が使用しているドイツ語となつたわけではない。この辞書は、グリム兄弟以来の伝統が、いかにグローバル化された現在の世界に合致するかを見せてくれる。このプ

プロジェクトには多くの専門家が様々なかたちで協力しており、その数は合わせて五十人近くになるとのことだが、いずれにしてもこの二言語間辞書の発刊は、ヨーロッパにおける東アジア言語辞書の里程碑となるだろう。ドイツ語と日本語に何らかのかたちで関わる多くの人々にとつても、この辞書は情報獲得と知的解明のための最良の窓口となってくれるに違いない。

日本においては先に触れた一般の新聞以外にも、『週刊読書人』、『図書新聞』、ドイツ学の専門雑誌『ドイツ文学』などが、この辞書についての詳細な記事を掲載した。雑誌『ドイツ文学』の執筆者は、作家で独文学者でもある柴田翔であったが、彼は特に、この辞書の草分け的・先駆的な側面を高く評価していた。またドイツと同様、日本でもこのプロジェクトの文化的意義が認められ、やはり独文学者の荻野蔵平は『週刊読書人』の記事に「大文化事業です！」と書いている。また社会哲学者の三島憲一は毎日新聞で「明治以来の日本語の多様な側面を再現するこの辞典は、ネット時代の安易な検索では不可能な広がりと深さを持っている」と述べていた。ドイツの法律家の雑誌『Zeitschrift für Japanisches Recht』には、発行者の一人である法学教授のモーリッツ・ベルツが、こう書いていた。「これまでの法律辞典への実に喜ばしい補足・補充である〔……〕日独関係特に法学分野は、これからの長い期間この辞書の恩恵を蒙ることに

なるだろう」。

これら両国メディアからの引用でもわかるように、第一巻の出版に際してすでに、このプロジェクトの大きな意義とその質が認められており、私たち発行者や出版社はこれらの反響から、自分たちのコンセプトとそれまでの努力が正當に認められたことを強く感じたのである。しかし同時に、そこはかなり目立っていたのは、よりよつてドイツ日本学からの反応が、まったく言っていないほどなかったことである。ドイツ語圏日本研究の専門雑誌などにも、内容のある



図6 『和独大辞典』第2巻

書評はまったく出なかった。なんとも奇妙に思えたこの「反響」の背景は自ら推定する以外ないのだが、その理由はもしかしたら、これから触れることになる大きなテーマとの関連で見るべきなのかもしれない。

いずれにしても、両国のメディアにおける高い評価とは裏腹に、この和独大辞典プロジェクトに対してはなんとも形容し難い冷風が吹いていたのである。ここでその事実に触れるのは、それを批判するためではない。そんな状況から、その背景にある大きな問題と、それを俯瞰できる範例的側面が取り出せるからだ。つまりこの和独大辞典編纂の過程には、すでに触れたような、学問史的・時勢的な全体像の反映が見られるのであり、部分的にはまるでミステリーのようにもあつたその展開には、確かに象徴的要素が含まれていた。

二〇〇四年の秋、それまで中心となつて和独大辞典プロジェクトを進めてきた私は、D I J所長としての八年間の任期を終え、その間休職していた古巣のベルリン自由大学へと戻つた。ところが私の後任として赴任した新しい所長は、それまで研究所の名で行つてきた辞書編纂資金外部調達の努力を、なぜかやめてしまつたのである。つまり、プロジェクトが必要とする外部からの資金がそれ以来途絶えてしまつたのだ。しかしそれだけではなかつた。一年半後の二〇〇六年、この後継者の所長は突然、研究所最大のプロジェクトであつた和独大辞典編纂を放棄したのである。研究所と出版社の間

で結ばれていた契約も、一方的に無効とされた。つまり我々の『和独大辞典』は、そのままでは第一巻が出る前に「死んでしまう」ことになつたのだが、彼はさらに痛撃を加えてきた。「発行者に返す」という奇妙な表現で、以前から決められていた研究員一人分の経費

以外は、プロジェクトを研究所から追い出すと決めておきながら、『和独大辞典』の著作権を発行者と出版社に渡すことは拒否したのである。和独大辞典プロジェクトは研究所から追い払うが、その権利は渡さないというのだ。研究所とは関係がなくなり、大切な基地を失つてしまつた和独大辞典プロジェクトは、それでも所長の下で彼の容喙ようかいを受け続けることになるのである。もちろん、そんな理不尽な条件を受け入れることはできない。その後は、D I Jと出版社の間の裁判となつた。出版社は和独大辞典プロジェクトをこれまで通り続行できるよう、時間と費用のかかる複雑な裁判を通して、著作権を自分たちのもとに留めるため戦う以外なかつたのだ。幸いと言うべきか、当然だと言うべきか、いずれにせよ裁判に勝つたプロジェクト側は、ここで所長の権力の外へ逃れ自由となり、最大の難関を潜り抜けたのである。和独大辞典の編纂費用の調達は、それ以降、私の重要な責務となつたのだが、このようなプロジェクトは本来、必ず何らかの研究機関や親団体に属すべきであり、そうでない場合は資金の調達が非常に難しくなる。しかし幸いなことに、中心的な協力者たちと出版社は、この非常に難しい時期を乗り越え和

独大辞典完成に向けて進む強い意志を持ち続けたのである。

その後、私が戻ったベルリン自由大学の援助により、そこに新しい基地・故郷を得たプロジェクトは、日独両国の財団や個人の寄付などにより、三人のフルタイム編集者を中心としてプロジェクトを進めていくことができたのだが、しかしそれもまた、出版社側の冒險的な賭けが加わり可能となったのである。辞書の著作権を保持するために費用のかさむ裁判を闘った後、出版社はさらに『和独大辞典』のウェブ・ヴァージョンの自費製作を強いられたからだ^③。その頃すでに、無料で使用できるウェブ・ヴァージョンを提供することなしでは、公的あるいは企業の資金などで運営されるドイツの財団や機関から、研究費などの援助を受けることができなくなっていた。その条件を受け入れることによって初めて、援助費の申請が可能となるのである。そのようないくつもの関門をくぐり抜けた後、二〇一八年の末までに最終第三巻の完成原稿を出版社に提出すると条件の下、ついに二〇一五年、ドイツ最大の公的学術機関DFG (Deutsche Forschungsgemeinschaft/German Research Foundation) からの、『和独大辞典』完成までの援助資金交付が決まったのである。私たち全員の肩の荷が下りた瞬間だった！

『和独大辞典』編纂の仕事は、以上のような経過をたどってきたのだが、私がDIJを去る二〇〇四年まで毎年、このプロジェクトの編纂過程が研究所の年間報告にかならず載っていたにもかかわらず

ず、その後DIJは、それがもともと研究所のプロジェクトであったことを隠すようになった。研究所がその後このプロジェクトについて何らかの形で触れたのは、「一九九七年（実際は一九九八年）から二〇〇九年までプロジェクトを援助した（研究員一人分費用）」「プロジェクトは発行者たちに返却された」という、ホームページ上で二つの短いコメントだけだった。しかし所長はその後、我々の『和独大辞典』を間接的に中傷するような態度を取りつづけ、インターネット上にあるウィキペディア方式の和独辞典を「存在する最大の、最も信頼のおける和独辞典」と褒め上げたのである。すでに出版されていた私たちの『和独大辞典』の第一巻には一言も触れず、またリンクを付けることもなかった。かなりの悪意が感じられるこの所長の見解を、理由不明な彼の個人的動機と取ることも可能だろうが、しかし研究所の学術理事会は「プロジェクトを発行者へ返す」、つまり研究所から追い出すという所長の要求を、全会一致で受け入れたわけではなかった。日本人とドイツ人の理事会メンバー二人が激しくそれに反対し、それでも所長の要求が通ると、両者ともに理事を辞任したのである。しかしその出来事はうやむやにされてしまった。ここで、理事会の決定過程に参加した人々それぞれの個人的動機以上に興味深く思われるのは、むしろそんな決定を後押ししたと思われる次のような背景である。

時代変遷の反映としての和独大辞典

出版された『和独大辞典』へ対する、ドイツ日本学の奇妙なほどに「控えめ」な反応の背景には、いったい何があつたのか。出版後もあまり書評がなかっただけでなく、日本学のウェブサイトやメーリングリストにおいてもほとんど反響がなかったからだ。長い間多くの人々が首を長くして待っていたと言われた、この基礎的参考書の規模と質を考えれば、実に不思議なことであつたが、それだけではなかった。ドイツにおいても日本においても、『和独大辞典』の販売数が期待を大きく裏切つたのである。プロジェクトが始動した一九九八年以降、このような辞典の必要性が劇的に低下したのだろうか。

ドイツの古い世代の学生たちは大学に入ると、まずどのような基本的参考書が自分に必要かを教師や先輩に尋ね、自立して勉学に励むためにも、辞書などの参考書をすみやかに手に入れるよう努めたものだ。もちろん、そのような書物は高価である。そこで学生たちは、誕生日やクリスマスプレゼントとしてそれらの書物を両親にねだつたりした。ところが現在の学生たちは、書物とまったく違った関係を持つてゐる。大学に入ってくる学生のごく一部だけが、高校を卒業するまでの日常を書籍とともに送り、それと密接な関係を築

き、読書の価値や楽しみを経験したに過ぎないのだ。ヨーロッパにおいてポローニャ・プロセスと呼ばれている広範な大学改革の試みは、大学の制度を高校までの学び方にぐつと接近させたため、学生たちのイニシアティブを非常に弱める結果となつてしまつた。教え方も学び方もスタンダード化され、最小・最短の時間と労力で効果を上げることが唯一の目標になつたのである。

以前の大学教育では、学生自身が行う資料の探索や解明努力などが、学習プロセスの当然の一部と考えられていたが、デジタル革命というものがそれをまるで変えてしまつた。学習のための材料があつという間にコピー・分配されるのが可能となつたため、今の学生たちは大量の学習材料・資料が自分の前に積み上げられるのを、まるで当然であるかのように思つてゐる。ドイツ日本学の教師のなかには、教材として日本語文章の部分を集めてコピーし、それにわざわざ語彙表を付けて学生にわたす者さえいる。そんなことではもちろん、学生が自ら書物を手にし、それぞれの質を比較し判断するための経験を磨くなどということになるはずがない。そのかわりに学生の多くは、なるべく楽な方法で、つまりデジタル辞典やインターネットで検索して目的を果たす。参考書を持つとうなどとの「野心」をほとんどの学生が持たないだけでなく、高校卒業まで教わらなかったため、書物の内容それぞれの質を測る能力が彼らにはほとんど備わつてゐない。またやはり学ぶことのなかつた、専門的知識

に対する敬意というものがなかったため、無償でないものにはまったく手を出さない。学生たち（そして彼らを教育している特に若い世代の教師たち）は、すでに以前とは異なる優先順位を定めてしまったようだ。「自立的な精神を養うための包括的教育と教養」というフンボルト的な理想は、合理的・功利主義的考えの前に屈服してしまったようだ。大学教育とは（訓練）を受けるためのものであり、（教養）つまり「人間形成」のためではない——このような、経済的合理性というものが押し付けてくる思考が、教養や人間形成といった精神的な領域を侵し始めているのである。私たちの日常のほとんどを支配するネオリベリズムの思考は、教育政策にも強い影響を与えており、そこでは、卒業後の職業プロセスにうまく組み込まれるための訓練を受けた学生たちが、なるべく短期間で大学を走り抜けることが求められている。

しかしここで避けねばならないのは、以前は高く評価されていた「アカデミック文化・伝統の黄昏」とも呼べるこのような状況を、若い世代の責任にすり換えてしまうという間違いを犯し、この問題の背景に隠れている大きな連関を見過ごしてしまうことである。

私たちの『和独大辞典』の第一巻、第二巻は共にすでにデジタル化され、誰でもが無償で問題なく利用できるようになっていたが、それはすなわち、利用者がこの辞書を買う必要がないことをも意味している。これまで大きな労力と費用を『和独大辞典』につぎ込ん

できた出版社にとつて、それはあまりありがたい状況ではないだろう。しかしドイツの助成金制度がそう決めたことでもあり、従うかはしない。すでに触れたようにこの制度は、公的・私的資金の助成を受けた学術結果を、すべてデジタル化し無償で提供することを義務としているのだが、この規則はもちろん、あらゆる知的生産物なるべく安く、できれば無償で手に入れたいという消費者側の欲求を助長することになる。そのような欲求は、およそ知的生産物への敬意や評価を意味してはいないし、学生の多くが図書館をほとんど利用しないという傾向を後押ししている。すでに知られているように、学生たちはインターネット上で簡単に見つけることができるテキストや参考資料だけを利用しがちである。このような「インターネット世代」に対してよく言われる、情報の質的判断、確かな学問的成果とジャーナリズムの即席見解や個人的発言との間にある差を見分ける能力の欠如は、教育や学問世界の根本的变化の産物でもあり、そんな状況は、目先の効果や数字だけを追う政治によつてさらに助長されている。

もちろんそんな考えは、古い世代に典型的な悲観文化論的嘆き節に聞こえるかもしれない。しかし私のこのやや大雑把な現状描写は、多くの「先進国」における価値観変遷や主要問題展開などの一般的傾向や予測と合致しているのである。それは当然であろう。グローバル化やIT革命などにより、あるていど比較可能な先進社会の発

展は、国際的にかなり似かよったものになってきているからだ。そのような一般的状況を背景として、ここでさらに現状を具体的に描写してみよう。特に、そのような発展が私たちの『和独大辞典』とその未来にどのような結果をもたらすかについて。

言語が失ってしまった価値

和独大辞典プロジェクトと、それに対する反応の変化などが組み込まれるべき文脈を整理するため、いくつかのキーワードに触れることにする。ここでそれと深く関わることはできないが、背景に大きな包括的テーマを隠し持つそれらのキーワードを個別に追究することには、大きな意味があると思われる。

一九九〇年代の初期、「pictorial turn」あるいは「iconic turn」と呼ばれるものが、人文科学とその関連分野における思考を「言語への固着から脱却させ映像へ向け直す」という、それまでの認識のかたちを大きく変革する新しい理論として出現した。それを説いたのは、それぞれが独立してこの理論を発展させた、米国のW・J・T・ミツチェル（pictorial turn, 1992）¹と、ドイツのゴットフリート・ベーム（iconic turn, 1994）²の二人であり、彼らは日常文化から得た予測を基礎に組み立てたこの理論を、「異なる思考法」と呼んだ。ここで彼らの理論的位置や関連議論にぐわしく触れる余裕はないが、そ

れをメディアの覇権や権力、メディアの洪水に支配される社会との関連で見るべきだと考えられたのは当然であろう。それに対して学問世界は、共同体における権力関係を基盤にした、これまで社会的・文化的に慣れ親しんだ認識法を追究する「視覚文化研究」（Visual Culture Studies）を立ち上げた。例えばドイツの芸術史家のホルスト・ブレーデカンブは、「一種の現実の創造」という映像行為理論を展開しているが、彼の理論とは「映像行為は現実世界に映像・イメージを送り出し、それらを登場人物にすることで事実を作り出す」というものである。

ここで、映像と言語の関係がこれまでどう変化してきたかに触れる余裕もないが、それでも、日常各層のコミュニケーションにおける言語の機能とその重要性が、今確実に後退しつつあることをここに認めることができる。月並な例ではあるが「絵文字・顔文字」の人気などからも、インターネット・コミュニケーションの性格を読み取ることができらう。しかもそのような状況は教育政策にも影響を与えており、例えばドイツの学校教育では今、正しいドイツ語使用法、正字法、文法などがもうほとんど教えられなくなっており、自己表現能力向上のための作文の時間もほとんど存在しなくなった。その結果、ドイツの子供たちの読み書きと文章理解能力は、PISAのテスト結果の国際比較でますます悪い結果を出しており、大学においても、他人の文章の読解や自分の文章を作る能力で、多

くの学生が非常な困難を抱えている。それを証明するかのよう
二〇一六年の八月、ドイツで九万人の高校教師が所属する団体が、
高校までの生徒たち、特に男子生徒は、もうほとんど何も読まな
くなったという衝撃的な調査結果を公表した。すでに「書籍の黄昏」
などという本も出版されている。もしそんな傾向が事実であるとな
れば、それは社会的・政治的な公的生活に参加するため、あるいは
自分たちの伝統や歴史を保つていくために必要な「文化的技術」が、
今大きな危機にさらされていることを意味する。

高名なドイツの社会言語学者ユルゲン・トラバントは、言語に対
する敬意の消失が、グローバルな文脈での人間の共同生活にどのよ
うな影響を与えるかという、広範囲な予測を多くの書物を通して発
表しているが、そこでトラバントは、ヨーロッパ各国の比較で、ド
イツ人が自分の母語に対して最も不忠実・不誠実であるとの結論を
述べていた。ドイツ人に顕著なそのような性格は、『和独大辞典』
にとつてもかなり悲劇的である。ヨーロッパ共同体の中で最大の人
口を抱え、最も多くの予算を負担しているにもかかわらず、ドイツ
語はヨーロッパ議会で脇役しか演じていないという現実を、ドイツ
人は何の抵抗もなく受け入れている。また、共同体が持つ巨大な翻
訳システムは、今ではほとんど意味を持たなくなつてしまった。重
要な書類のほとんどが英語で作られ、他の言語には訳されなくなつ
てしまったからだ。しかしここで言う英語とは、それを母語とする

国々の英語とは異なる「人工語」「歴史を持たない言語」、異言語間
コミュニケーションに際して必要な一種の「非常用言語」であり、
トラバントはそれを「グローバル方言 (Globalese)」と呼んでいる。⁶⁾
しかしそんなGlobaleseが、ヨーロッパにおいて「真のアイデンティ
ティ」を築くことはないだろうと私は思う。ヨーロッパにおける個
人的アイデンティティは、今でもその言語生活の多様性に置かれて
いるからだ。

コミュニケーション手段としての言語、世界観としての言語
そして「Globalese」の役割

言語というものが、自己主張のためだけでなく、他を理解するた
めにもあるという事実が、今まさに消え去ろうとしているようだ。
世界に触れそれを知覚する手段としての言語、貴重な〈世界観〉と
しての言語などという考えは、もうほとんど意味がなくなつてし
まったのだろう。ドイツ日本学の行動的で影響力のある一部の人々
は、そのような一般的傾向の典型的モデルと言えるかもしれない。
それらの人々は、学者としての自分の「国際性」というものを高め
るために、論文などをできる限り英語で発表しようとする。そうす
ることで、より多くの反響が期待できるというのだが、ハイデルベ
ルク大学の日本文学研究者ヴォルフガング・シャモーニは、この間

題についての議論で正當にも、「冷静に考えれば当然のことだが、この場合日本語こそが、最も多くの専門家の反響を期待できる言語のはずだ」と皮肉を込めてたしなめていた。しかし多くの日本学者（とドイツの他分野の学者の多く）は、英語という言語に対してほとんど絶対的な価値と地位を与えており、それはまるで宗教的情熱で信奉されるべき「聖なる言語」なのである。そんな事実を考えれば、D I Jの所長として和独大辞典プロジェクトを研究所から駆逐した言語学者（！）のフロリアン・クルマースが、英語を「人類が生んだ最も豊かで、最も明瞭な、最も融通性を持った象徴的正典・法典（the richest, most articulate, and adaptable symbolic code humankind has developed）」と呼んだのは、まったくの偶然ではなかったろう。⁽⁷⁾ 私には実に愚かしく思える、ある特定の言語を最高のものに祭り上げる彼の態度を思えば、二〇一〇年に、それまで日独英三つの言語で出版されてきた、ドイツの海外研究所であるD I Jの学術誌の名前を、ドイツ名の *Japanstudien* から英語の *Contemporary Japan* に変更し、雑誌の使用言語を英語だけにすると同時に、掲載する研究論文や記事の内容を「現代」に限定するという、非常に特徴的な改革を彼が実行したのも納得がいくのである。しかしこの改革に対しては、学界から強い抗議の声が沸き起こった。ボン大学の日本史家であるラインハルト・ツェルナーは、著名な人物をも含む九か国一三九人の学者の公開抗議文をまとめて、所長のクルマース宛に送ったのであ

る。⁽⁸⁾ さらに、日本独文学会（J G G）とドイツ語教育部会（V D J）も、この改革に対して明確な表現で抗議した。⁽⁹⁾ しかしそれらの抗議は、和独大辞典プロジェクト放逐に反対した二人の理事の辞任同様、またもやうやむやにされてしまった。つまりそれは、ドイツの文部科学省がD I Jなど海外にある研究機関を統括するために設けたマックス・ヴェーバーという名の機関が、これらの真摯な訴えや警告を真面目に取らず、ドイツの主流が現在そうであるように、言語問題をまるで重要と見なさず、抗議者たちを懐古主義に染まった文化国粋主義者のように見なしていたからであろう。

これまでのドイツ語と日本語の役割についての議論に油を注いだのは、主に二つの出来事だった。一つはすでに触れた二〇一〇年のD I Jにおける雑誌名や論文言語と内容の変更、もう一つは、二〇一三年にチュービンゲンで開催された、日独辞書・辞典編纂についてのシンポジウムである。社会学を専門とするあるドイツ人の日本学者は、日本学のメーリングリストの「[Student]」で、「ドイツ語と日本語の辞書編纂シンポジウムを英語で開催すると予告されているが、おそらく主催者は、このシンポジウムへの参加者たちが日独両言語に堪能でないと考えたに違いない」と皮肉っていた。もう一人の人物も、それを次のように処断している。「今を盛りの何かも英語に委ねるという流行が、会議の使用言語を直接関係のない英語にするとの予告においてほどの確にグロテスクに集約された

例を、私はこれまで経験したことがない」。しかしこのエピソードにおいても、批判者たちを小馬鹿にして英語こそがそのような会議の唯一の言語であるべきだと主張した側が、自分たちの考えを押し通したのである。ここでそれぞれの主張に触れることはしないが、そこで目立ったのは、英語、つまり *Globalise* に賛成する側の主張が、ほとんどの場合非常に感情的・攻撃的なことであつた。人文科学分野における認識のための道具・客体としての言語の特別な役割について説いた人々の主張を、*Globalise* 側はまったく受け入れようとしなかつた、と言うよりも、むしろそれを理解できなかったようだ。結果として言えるのは、現在のドイツ日本学においては、学問言語の役割についての真面目な討論がほとんど不可能だという事実だ。双方のポジションは固着化しており、特に自分の考えを主張するだけで相手の考えを聞こうともしない人々は、学問的水準の論述・叙述のためにはおそらく不十分だと思われる自らの英語 (*Globalise*) を、唯一無二の言語・学問語として受け入れてしまったようだ。このような状況を背景に、私たちの『和独大辞典』を眺めてみると、その受け入れ方の大きな変遷があるていど納得できるのである。

しかし近頃、そんな状況に抵抗するかのような動きが学問世界において見られるようになった。例えば最近の「トランスレーション・スタディーズ／翻訳学」の興隆や、相手の「声」を原音で聴きそれを真面目に取らねばならないとの、ポストコロニアル・スタ

ディーズから発せられている意見なども、現在の「言語軽視」的風潮に抗するものかもしれない。ここではその例として、ギャトリ・スピヴァクの名と、彼女のエッセイ「サバルタンは語ることができるか (*Can the Subaltern Speak?*)」(一九八八) が与えた大きな刺激を思い起こしてみたい⁽⁹⁾。そこでのテーマも「自分自身の声で話す」であつた。それ以降も彼女は、「相手の言葉へ直接踏み込む」という主張を説き続けている。意外に思えるのは、英語を最高の言語であると褒め称えると同時に、『和独大辞典』は「時代遅れの unnecessary 辞書」であると主張したドイツ人クルマースが、スピヴァクと同様、たとえ少数の使用を持つに過ぎない言語であつても、存在の価値はあると説いていることだ。クルマース自身がまるで意識していないこの明らかな内的矛盾は、彼の学問的日和見主義の表れでもあるだろう。このようなドイツ人自身によるドイツ語軽視という風潮は、先に触れた言語学者トラバントによれば、戦後七十年が過ぎた今でも効き目を保っている敗戦国民としての自己過小評価や、英語への限らない崇拜などへ陰を落としているという。いずれにしても、ドイツ人のそのような「言語的自己卑下」は、「アングロサクソンに対する卑屈な態度」として英語圏ですでに知られている。

「経済化」される世界と新しい学者的パーソナリティ

日本側においても、和独大辞典への関心が目立つほどに低くなった。その背景には、ドイツと同じような原因があるかと思われる。一九九〇年代後半の日本における大学改革の試みでは、第二外国語は必要だとされたため、英語以外の外国語教育は大きな打撃を受けたと聞く。近代日本においては、ドイツ語の専門語や表現の知識を持つことが、例えば法学、医学、化学、哲学、文献学などにおいてあるていど当然とされていたのだが、戦後日本の学問界は明らかに米国を指向するようになった。それでも、一九九〇年代の日本の大学ではドイツ学者がまだ数多く活躍しており、日本独文学会は当時、世界最大の規模を誇っていた。その頃出版されるドイツ語辞典類は、当然のように教師が自分と大学図書館のために購入し、学生たちにも薦めていた。しかし日本においても最近、ドイツと同じようにメディアのデジタル化や英語の影響などが強まり、学校や大学のカリキュラムもドイツと同じ方向へ向かっているようだ。日本の文部科学省が二〇一五年六月に八十六の国立大学へ送った、人文科学・社会科学分野を縮小ないしは廃止するようにとの指令^(?)は、一部の大学がそれらの部門への入学を中止・制限するという混乱を生んだようだが、私はここで、国際的にも大きな反響を呼んだこの

文科省指令の功罪に触れるつもりはない。しかしここで明らかにするのは、日本の文科省が取った、不必要が予想される分野を縮小するようにとの舵取りは、特に米国や英国などアングロサクソン系の諸国が現在行っているラジカルな大学「改革」と同一のものであり、それはネオリベラル的政策の下、学問だけでなくあらゆる生活空間の合理化・経済化を目指し、短期的利用価値だけを追う傾向の現われであることだ。そのような思考領域においては、『和独大辞典』のような長い年月を必要とするプロジェクトなど、少なくともそれが英語と関係がない場合、受け入れられない。“does not make sense!”というわけだ。

そんな状況を思えば、ドイツ日本学における時間を必要とするプロジェクトなどは、すでに歴史的遺物となつてしまったのだろう。その証拠を示すかのように、前に触れたDIJの文献目録・書籍目録シリーズでは、二〇〇六年以降新しい出版が一つもなく（最後に出版された本は、クルマース所長就任以前に始まっていたプロジェクトである）、これからの出版予定もまったくないのである。そんなプロジェクトは「アップ・トゥ・デート」ではないのだろうか。加えて、そのような出版物の著者たちは多くの場合、書物の後ろに自分を隠す傾向があるようだが、そのような態度は、強いナルシズム指向が見られる最近の学問界では受け入れられないのだろう。特に欧米型民主主義の下で顕著となりつつある、激烈な競争意識を基に

すべてを合理化して突き進むパターンでは、「個人利益の最大実現」と「自己意志の貫徹」が目標となるため、学問や教育の現場においても、自己愛や我欲は十二分に備えてはいるが、他人への感情移入や互いの信頼感構築の能力・意志を欠いたタイプの人間が有利となっている。

西暦一六〇〇年頃に発生した啓蒙主義以降の学問世界には、共同での真理探求という理想が存在していた。その例のひとつは、例えば英国の物理学者ニュートンである。彼は「自分は巨人たちの肩に乗っていたため遠くまで見渡せたのだ」と述べていたが、この巨人たちとは、先人であるガリレオ、ケプラー、コペルニクスなどを指している。何世代にもわたる熟考と探求を通して初めて真理にめぐり会えることで、共同の認識プロジェクトの達成が可能となるはずだが、教育や教養育成システムが、現在のようにただ個人的成功や競争に備えるものになったからには、近代の学問プロジェクトであり個人の生涯目標としても機能するはずだった、世代を越えた真理の探究という理想は、やがては消えてしまうことになるのだろう。その意味では現在、「共時態」と「通時態」の間で脱連帯化が進行しており、それと同時に、学問や科学システムへの信頼感崩壊も進んでいるようだ。私たちは今、そのような発展の証人になっているのかもしれない。

私たちの和独大辞典プロジェクトには、このような学問史と、日

本学に特殊な変遷が共に反映されているのである。つまり完成に向かいつつある『和独大辞典』は、価値観の根本的变化や言語の意義消失などに光を当てると同時に、複合的・総合的文章理解や言語で伝承されてきた諸々の周辺化・縁辺化に対抗して、言わば象徴的に、自分の居場所に踏み止まろうとしているかのようにも見える。そう考えれば、いつの日か必ずやって来るはずの『和独大辞典』編纂作業の完結と第三巻の印刷終了は、ある大きな流れの一種の最終点を飾ることになるのかもしれない。

『和独大辞典』の将来

もちろん『和独大辞典』のようなプロジェクトが、ドイツの学問風景から完全に消えてしまったわけではない。通常それらは、D I Jのような大学外の研究施設やアカデミーなどのプロジェクトとなつているのだが、文献収集や辞典編纂などは特に長い時間を必要とするため、十二年以上かかる長期プロジェクトのために、特別な援助プログラムが設けられている。その事実からも分かるように、過去の伝統のすべてが無効となつてしまったわけではない。

いずれにせよ、ここでもう一度はつきり言っておきたいのは、現代のメディアやメンタリテイの変化という文脈でのこれまでの私の発言を、単なる保守的で歴史悲観論的な現状批判と受け取られなく

はないということだ。そうではなく、私の発言はあくまでも、学問的書物が生まれ出る環境とその条件について考えてみようとの試みであった。

現在、『和独大辞典』編纂は最終コーナーをまわったところであり、発行者と出版社、すべての協力者たちが、その完成に向けて努力を重ねている。もちろん、悲観的気分などは毛頭ない。私たちはおそらく、いささか古風なタイプの人間であり、言語を通しての日独関係に大きな期待を寄せているのである。なんとと言っても、この『和独大辞典』は巨大な二言語辞典であり、根幹的なメディアでもある。今ではそれが書籍であるかデジタルであるかは問題ではない。両者共に、すでに読者に提供されているのだから。

まるで「シシュポスの労働」のようなこの大辞典がついに完成した暁には、日独の学者、翻訳者、通訳などあらゆる種類の専門家・仲介者たちが、この「宝物」の虜になることだろう。さらにこの『和独大辞典』は、ドイツ語圏外での日本研究辞書・辞典編纂プロジェクトのスタンダードになると思われる。先にも引用したチュービンゲン大学の言語学者、ハンガリー出身のヴィクトリア・エツシュバツハ・サーボ女史は、ヨーロッパの言語圏や人権などについての講演「ヨーロッパの言語的空間と日本の辞典」の中で、英語は世界的言語空間(global linguistic space)において、国際航空網、銀行業、気象学、EU事務など多くの場面で共通言語的役割を果たして

いるが、しかし中部ヨーロッパや東ヨーロッパには今でも、ドイツ語が文化や学問言語として重要な役割を果たしている言語空間(linguistic space)が存在し、英語にドイツ語、さらにはフランス語を加えない限り、少なくとも言語的に、日常がなめらかに機能しない場合があると語っていた。日本語も現在、いろいろなメディアを通してヨーロッパでの存在感を強めつつあるが、そのためにも、英語だけを通して日本語(つまり日本)をヨーロッパ各国に伝えるなどという、愚かな間違いを犯してはならない。間もなく完成する『和独大辞典』は、その意味からも、文化政策、学術政策のための重要な意義を持つことになるはずだ。¹²⁾

いささか迷走気味でもあったこの論考を、高名な比較文学者で哲学者のジョージ・シュタイナーの引用で終わらせたい。「言語辞典」というものは人類の歴史における宝庫である。リトレ、グリム、オックスフォードなどの辞典は、他のすべての書物を自分の内に取り込んでいるが、それだけではない。これから書かれる可能性のある本さえもがそこに含まれている¹³⁾、そうシュタイナーは述べていた。間もなく完成する予定の『和独大辞典』に対しても、同じことが言えると私は思う。

注

- (1) Johan Galtung, „Struktur, Kultur und intellektueller Stil. Ein vergleichender Essay über sachsenische, teutonische, gallische und nipponische Wissenschaft“, *Leviathan* 11/3, 1983, pp. 303–338; Irmela Hijiya-Kirchnerer, “Japanelogie and its ‘Teutonisms’: Reflections on a ‘National’ Approach in Japanese Studies,” *Othernesses of Japan: Historical and Cultural Influences on Japanese Studies in Ten Countries*, edited by Harumi Befu, Josef Kreiner, Munich: Iudicium, 1992, pp. 171–185.
- (2) それらのタイトルはすべてD.J.J.の文献目録・書籍目録シリーズ (Bibliographische Arbeiten) として出版された。詳しくは以下を参照。 www.dijokyoo.org/publication-type/bibliographische-arbeiten-aus-dem-deutschen-institut-fuer-japanstudien/
- (3) 第1巻 (<http://www.japan.de/wb/index.php>) から第11巻 (<http://www.japan.de/wb/band2.php>) が公開されている。
- (4) W. J. T. Mitchell, *Picture Theory: Essays on Verbal and Visual Representation*, Chicago: University of Chicago Press, 1994.
- (5) G. Boehm, ed. *Was ist ein Bild?* München: Fink, 1994.
- (6) Jürgen Triaub, *Globalistisch oder was? Ein Plädoyer für Europas Sprachen*, München: C. H. Beck, 2014.
- (7) Florian Coulmas, “English Monolingualism in Scientific Communication and Progress in Science, Good or Bad?” in *Linguistic Inequality in Scientific Communication Today: What can Future Applied Linguistics Do to Mitigate Disadvantages for Non-anglophones?* edited by Augusto Carli and Ulrich Ammon, *AILA Review*, Vol. 20, 2008, pp. 5–13.
- (8) ラインホルト・シェルナーのホームページ「古都藩 (Koroba)」でオープン・レター (http://koroba.japankunde.de/?page_id=927) を雑誌 (<http://koroba.japankunde.de/?p=1016>) が参照している。
- (9) J.G.U.やV.D.J.のホームページではその関連文章を二〇一六年九月三〇日現在見ることが出来る。
- (10) Gayatri Chakravorty Spivak, “Can the Subaltern Speak?” in *Marxism and the Interpretation of Culture*, edited by C. Nelson and L. Grossberg, Chicago: University of Illinois Press, 1988.
- (11) それに対する日本における反響について、例えば『中央公論』二〇一六年二月号特集「国立大学文系不要論を斬る」を参照。
- (12) Viktoria Eschbach-Szabo, “Japanese in the European Language Space,” *Journal of the Faculty of Letters*, (No. 220) (Tokyo: Chūō University Press, 2008) pp. 59–69.
- (13) George Steiner, „Eine gute Lektüre ist ein Dank an den Text“. Interview, *Neue Zürcher Zeitung*, April 18, 2009, <http://www.nzz.ch/eine-gute-lecture-ist-ein-dank-an-den-text-1.2424447>.